○置舟の説

置舟は本意になき事なれどもいつの頃よりか始まりて當世もつぱら用ひ來れり。

凡そ舟の内に水を見るを嫌ふゆゑに高く釣をならひとす故に小高き花臺にのせて置方よしといふ水草は釣舟には生べからずすべて水草は置花に用ひてよし。

置船は鎖を舳の方へ流し置也と云ふ。

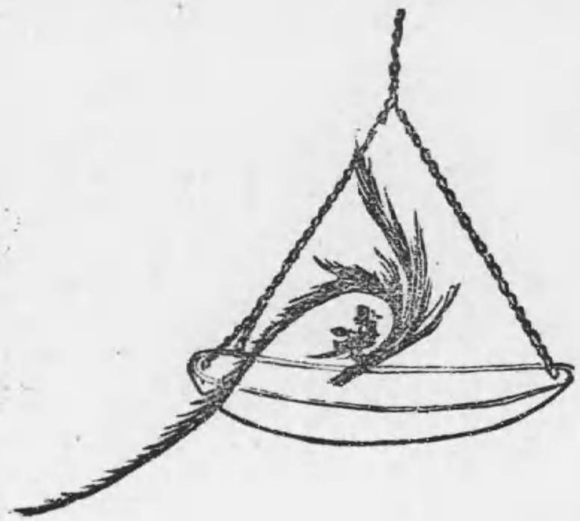
○是も順風に帆を上たる體なればいさぎよく行船といふべし。

竹筒の置船

菊

出船の形也

入船

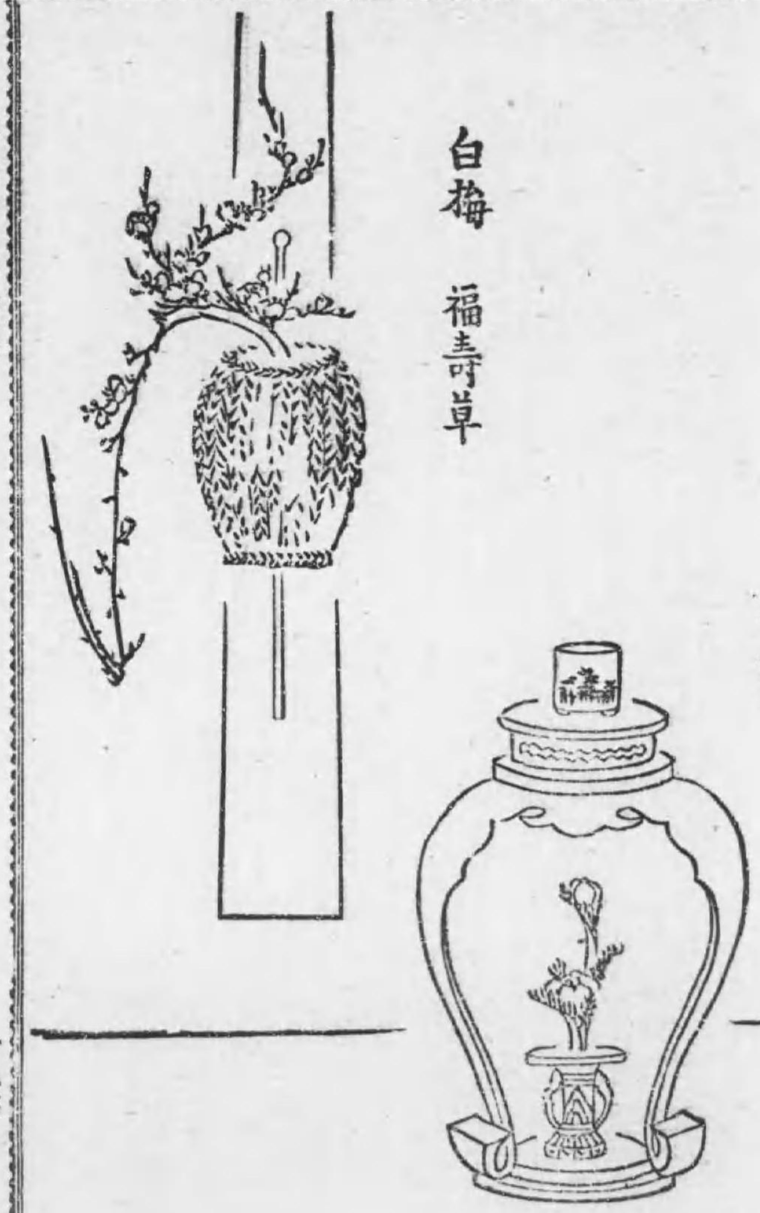


○凡て白銅の船は前後しれがたし鎖の一すじある方を船前とし二筋あるを船後とす。

出船入船は圖のごとし尚功者の業を以て曲をなすことは時の宜しきに隨ふべし泊船は逆風にて出帆なりがたきゆゑかゝる體なれば碇花を入て櫓花帆花の類は入ざる也則ち碇は前の方へふろすべし逆風にて船を吹もどすゆゑに舳先の方へ碇を下す是船のならひなり或は川口に入こむ船又は川船等は船を水上に向はせて水上へ碇を下すを法とす是流るゝ船を留る也

白梅　福壽草

一鬧



杜若二十七株

松

水藻蘆

一留

白梅

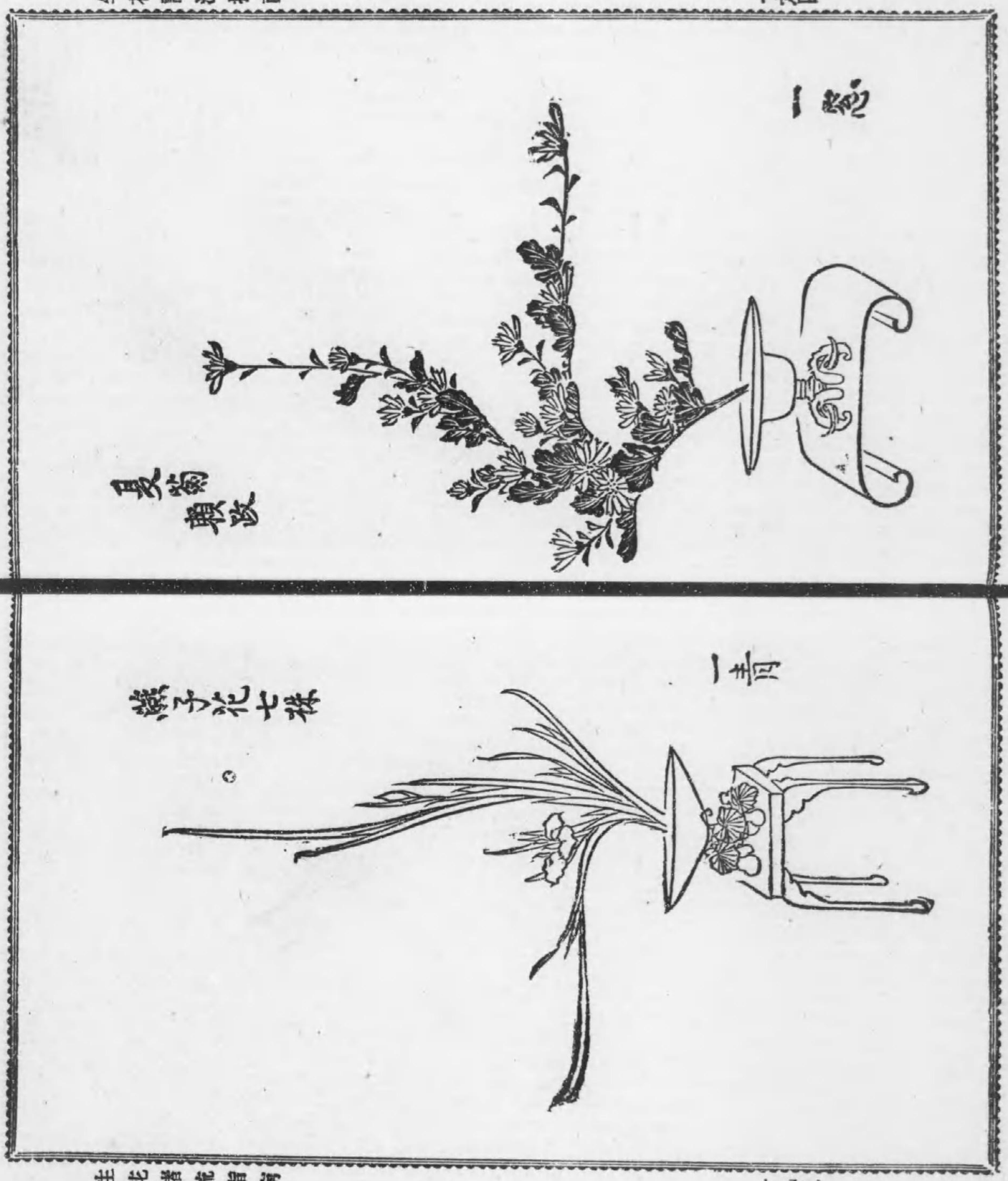
一石

朝白

梅秀女

馬耳蘭

文居


夏菊
朝改
一
蘭
一
春
蘭子花十株

ほころび梅　石竹

一戈

うきゝ川　村雪

一参

女郎花

一重

山茶花

一方年青

一賀

白梅

梅山

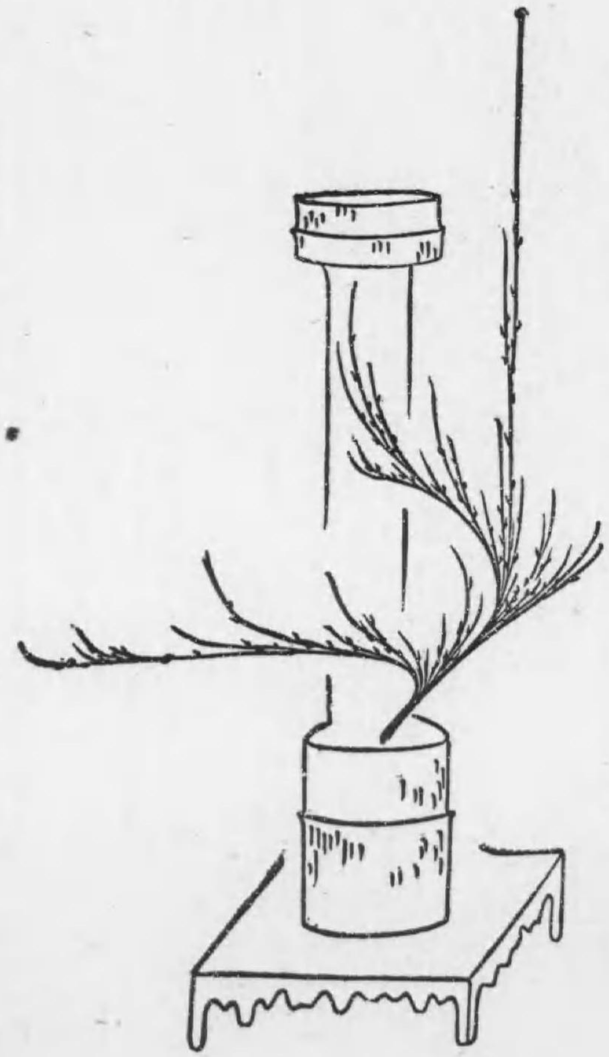
紫藤 うきつ

一信

茶の花

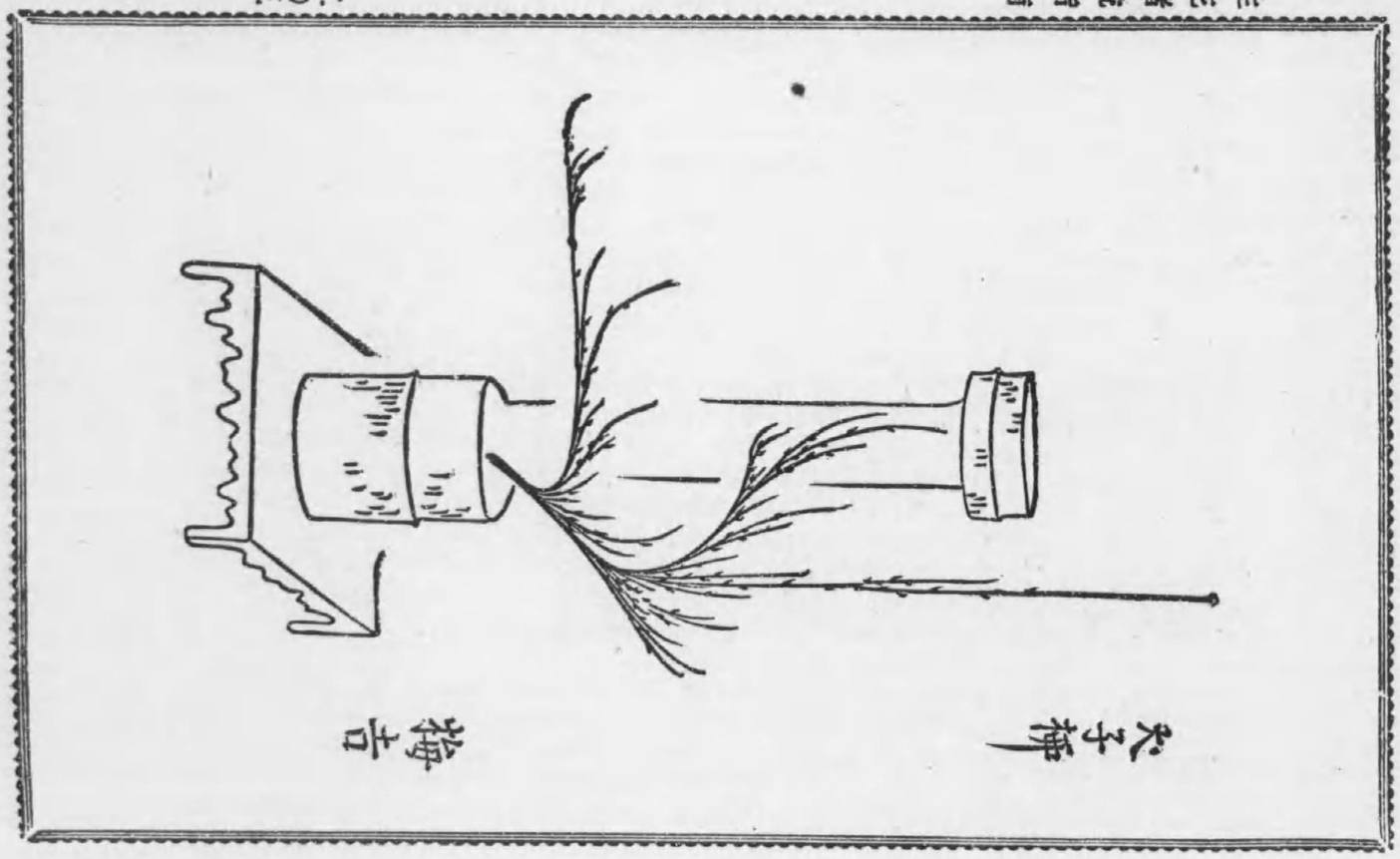
万年青

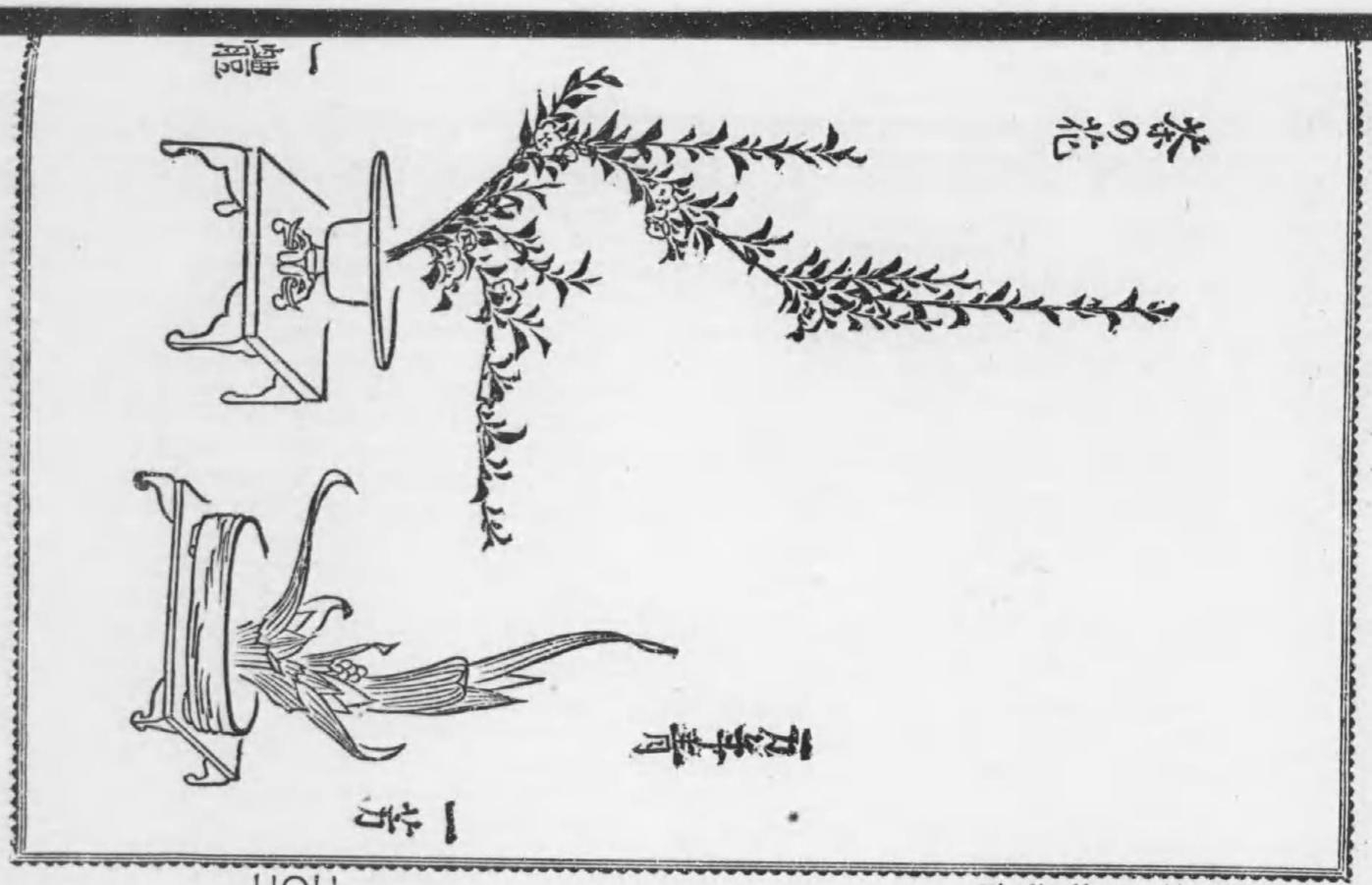
一芳



梅吉

天子柳

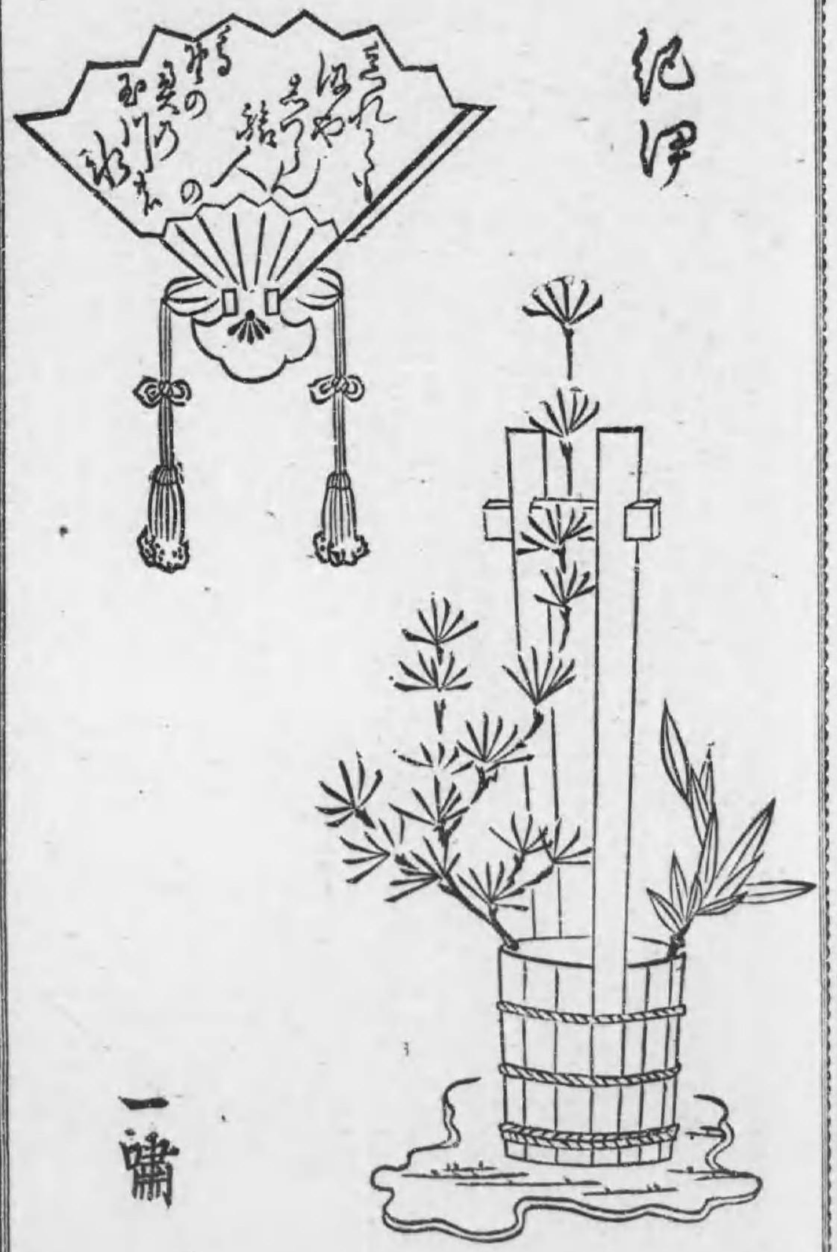

犬子佛
鈴子吕


米弥の花
犬子佛吕
一竹
一竹

夏菊
富士の雪

一草

紀伊



一嘯

柳　杜若

一谷

白梅

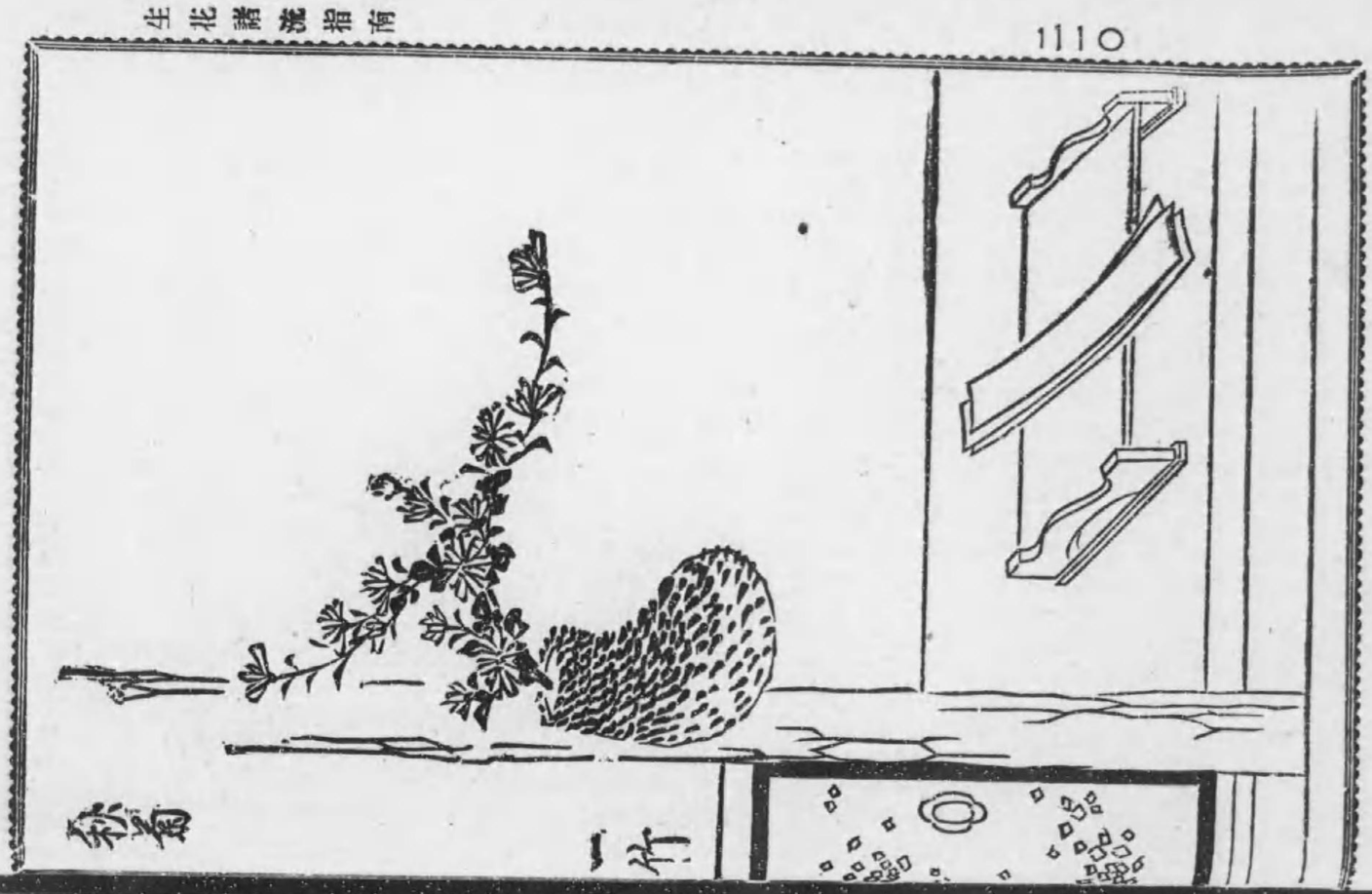
一壽

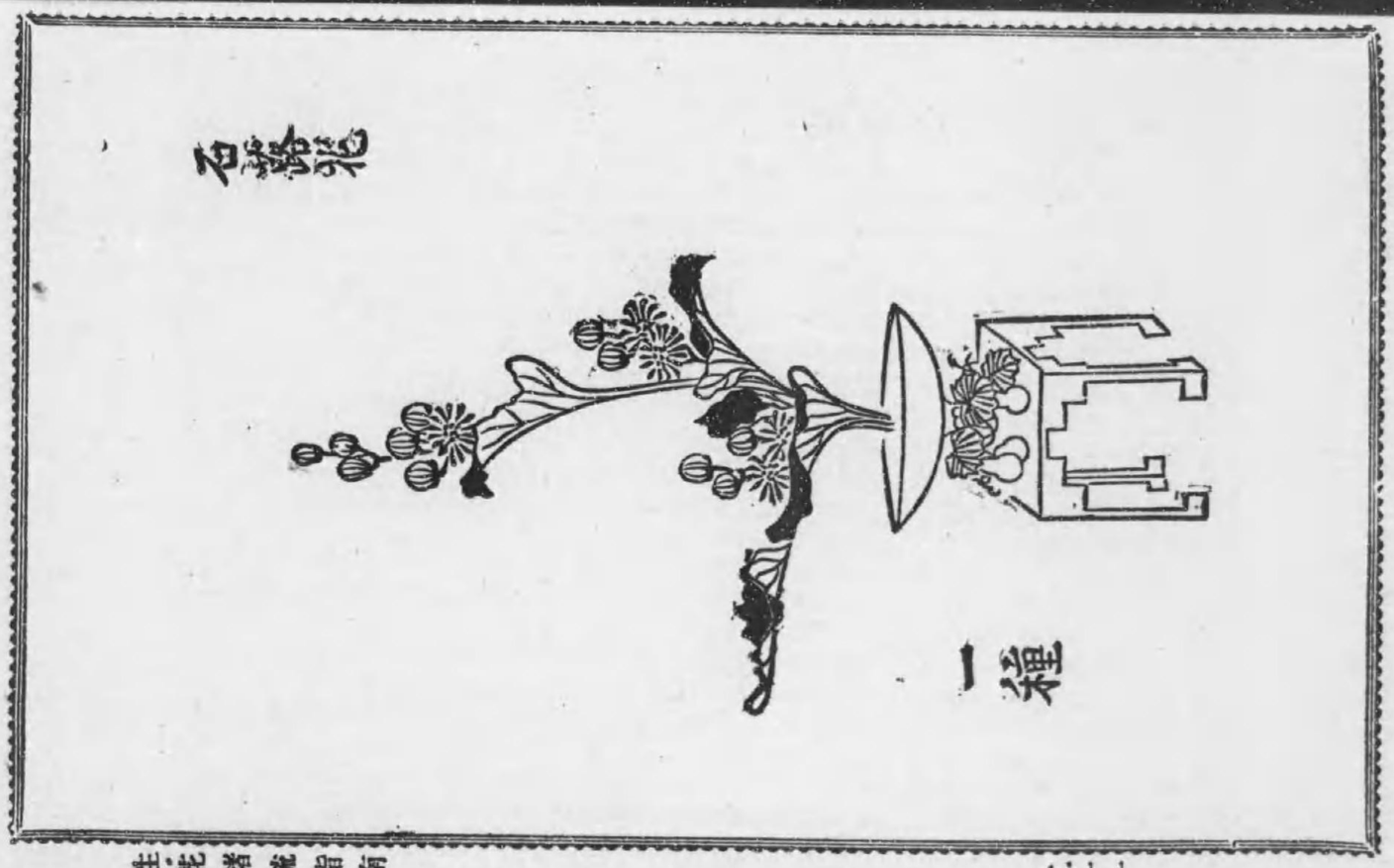
紫陽花

梅見安

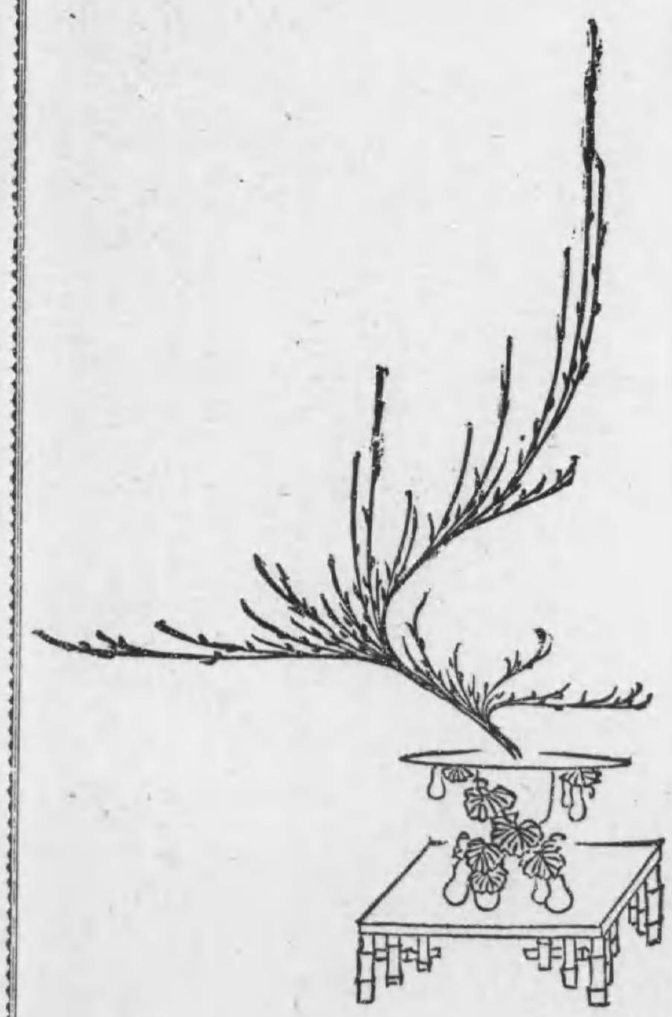
白萩

一尤


行
彩菊


草
石蕗花

犬子柳

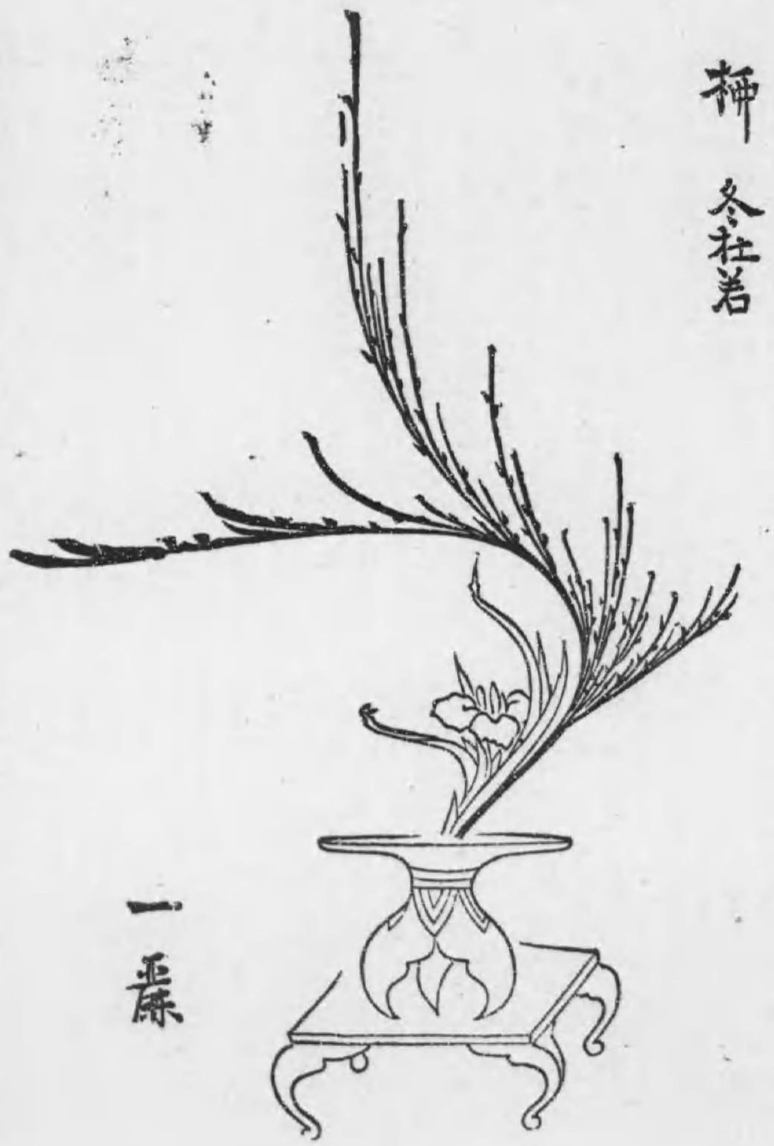


一水

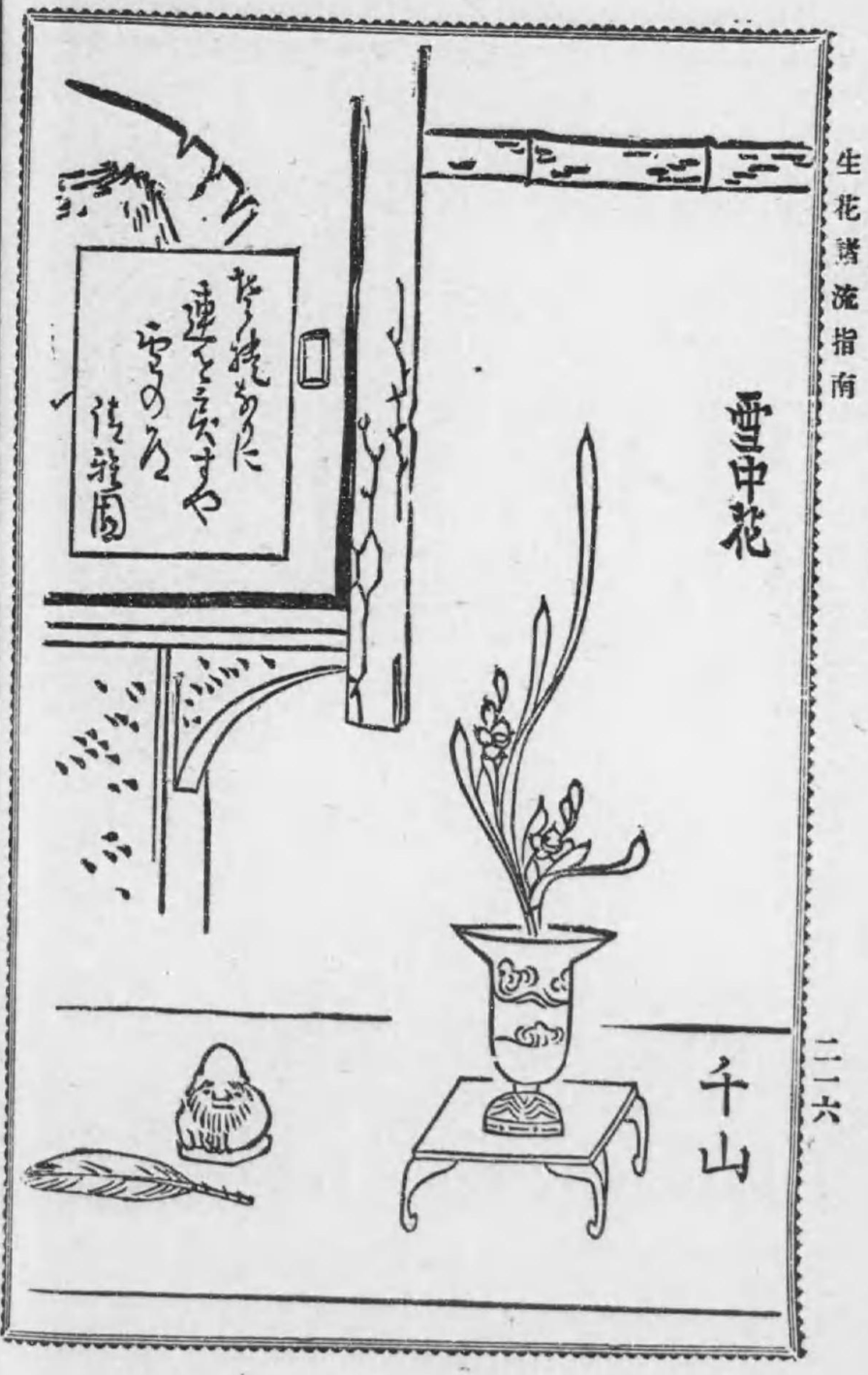
むらし桜

虛凱莽
清耳

竹朝貝
うきつ五株
一敬


榊 冬杜若
一蘇

雪中花



芍藥

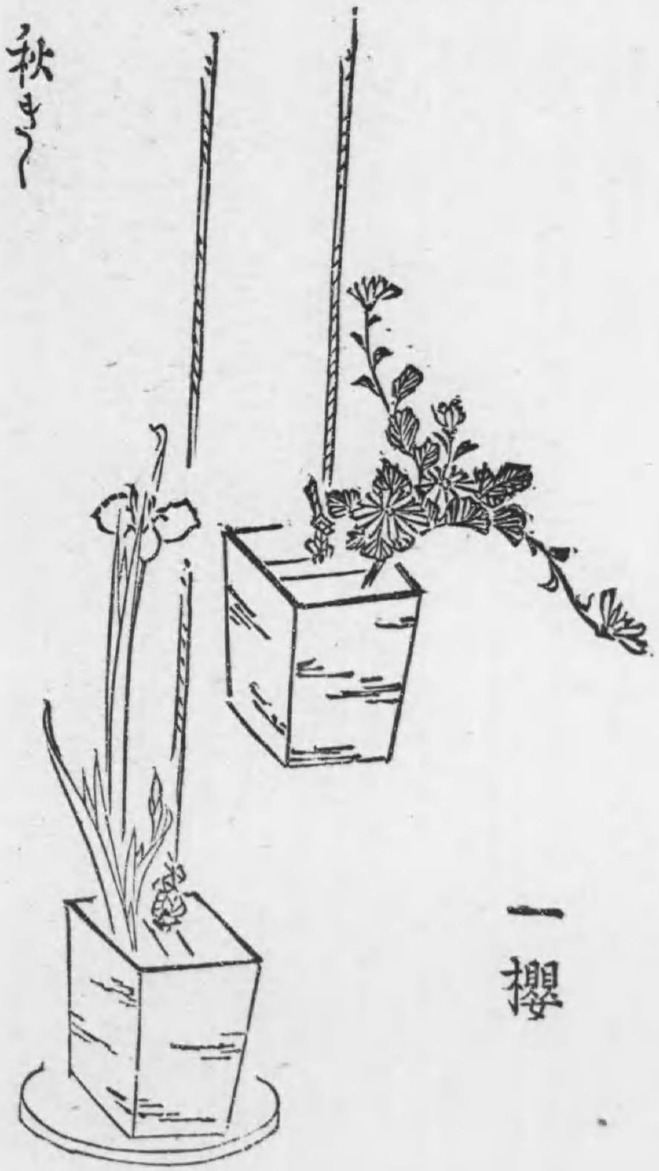
松藤

馬耳蘭

一明

犬子柳

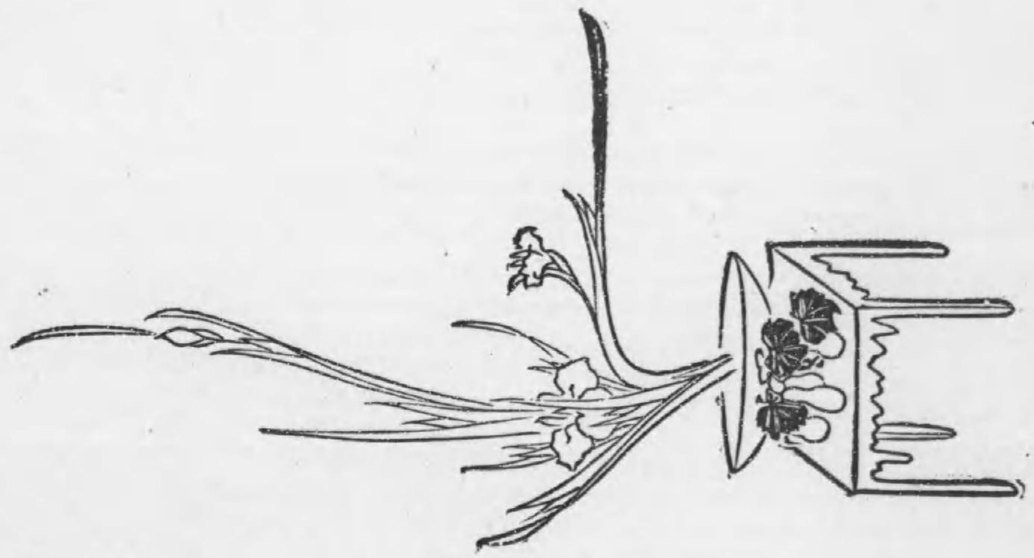
梅仲



一櫻

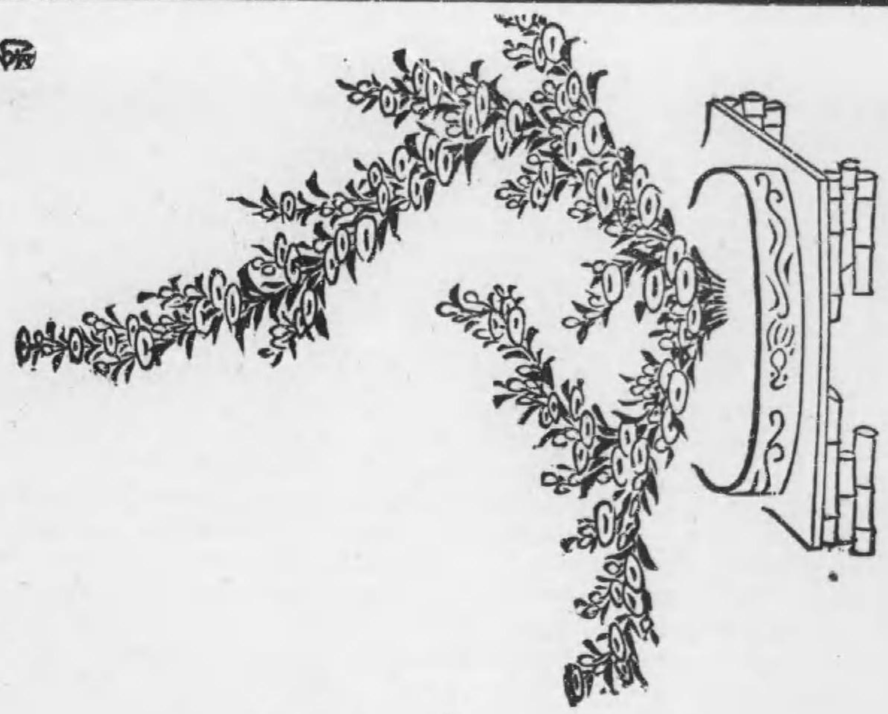
燕子花九株

一要



神谷

菖蒲



一世

夏水仙

著莪

梅樹

小太翁

本枝ふる本芽のうるみきめ袖めもえ
ふかめを京八むとちろ芽

一笑

圓柏

一峯

南天樹

一挿

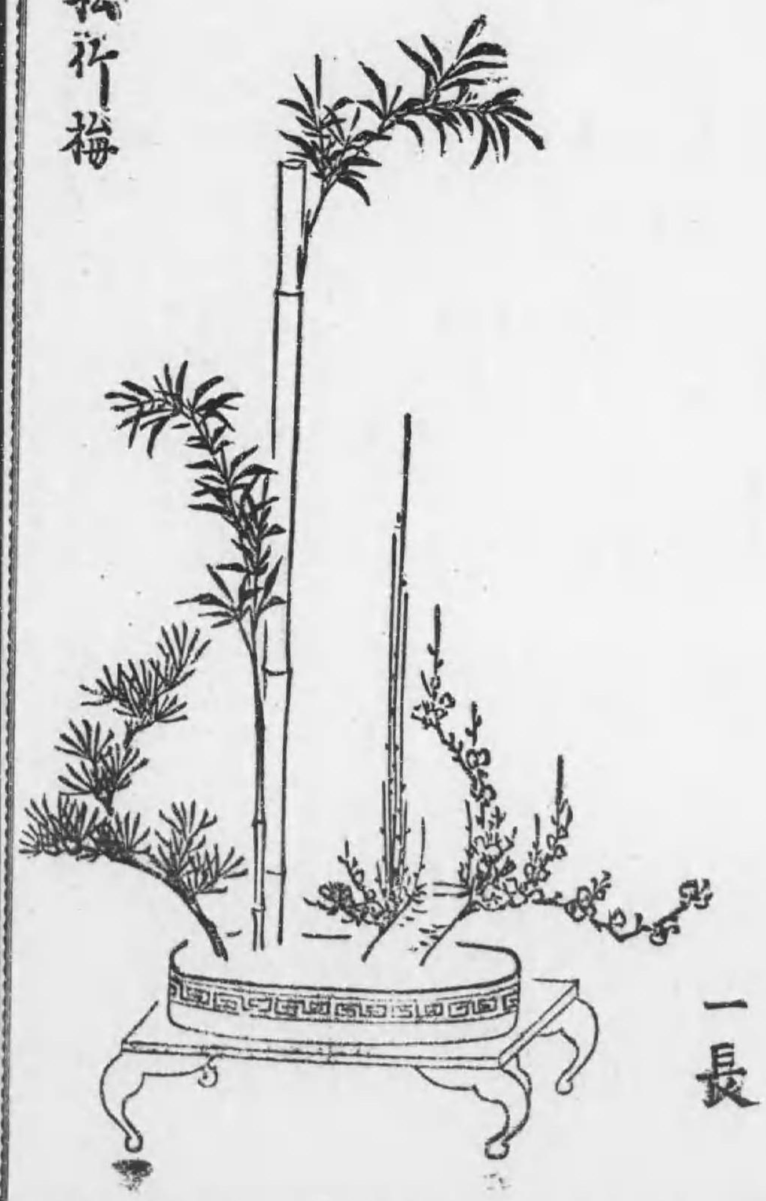
白梅

一亀

櫻

一白泉

松竹梅



一長

一德

著莪

一芳

櫻

一成

白百合

一波

木柳

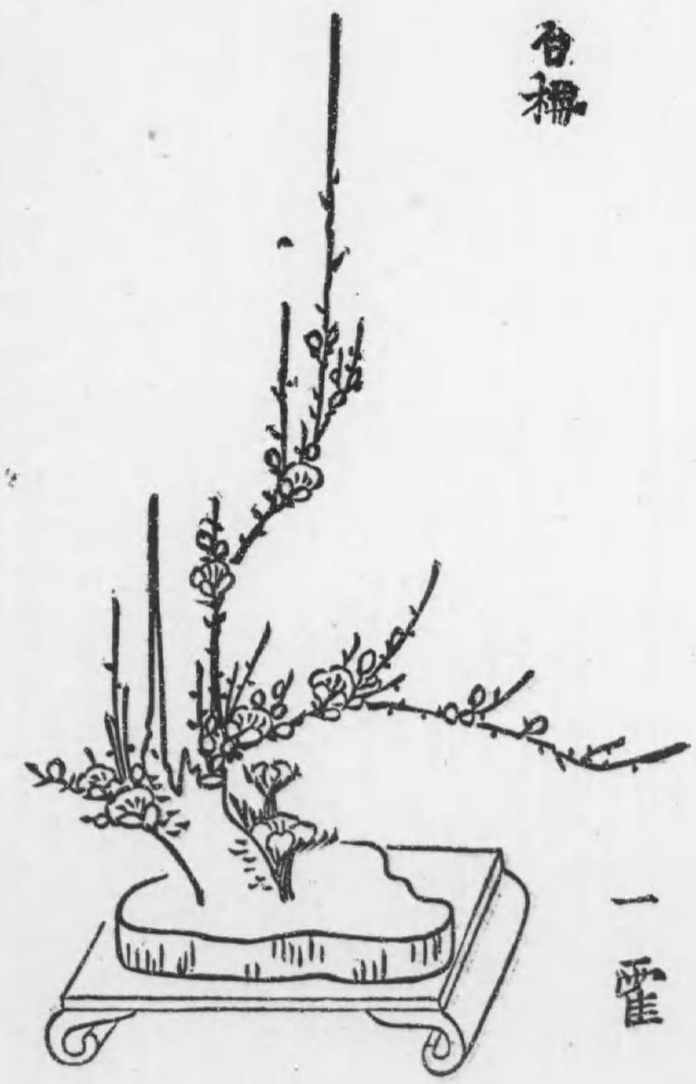
一合

一曠

一調

一勢

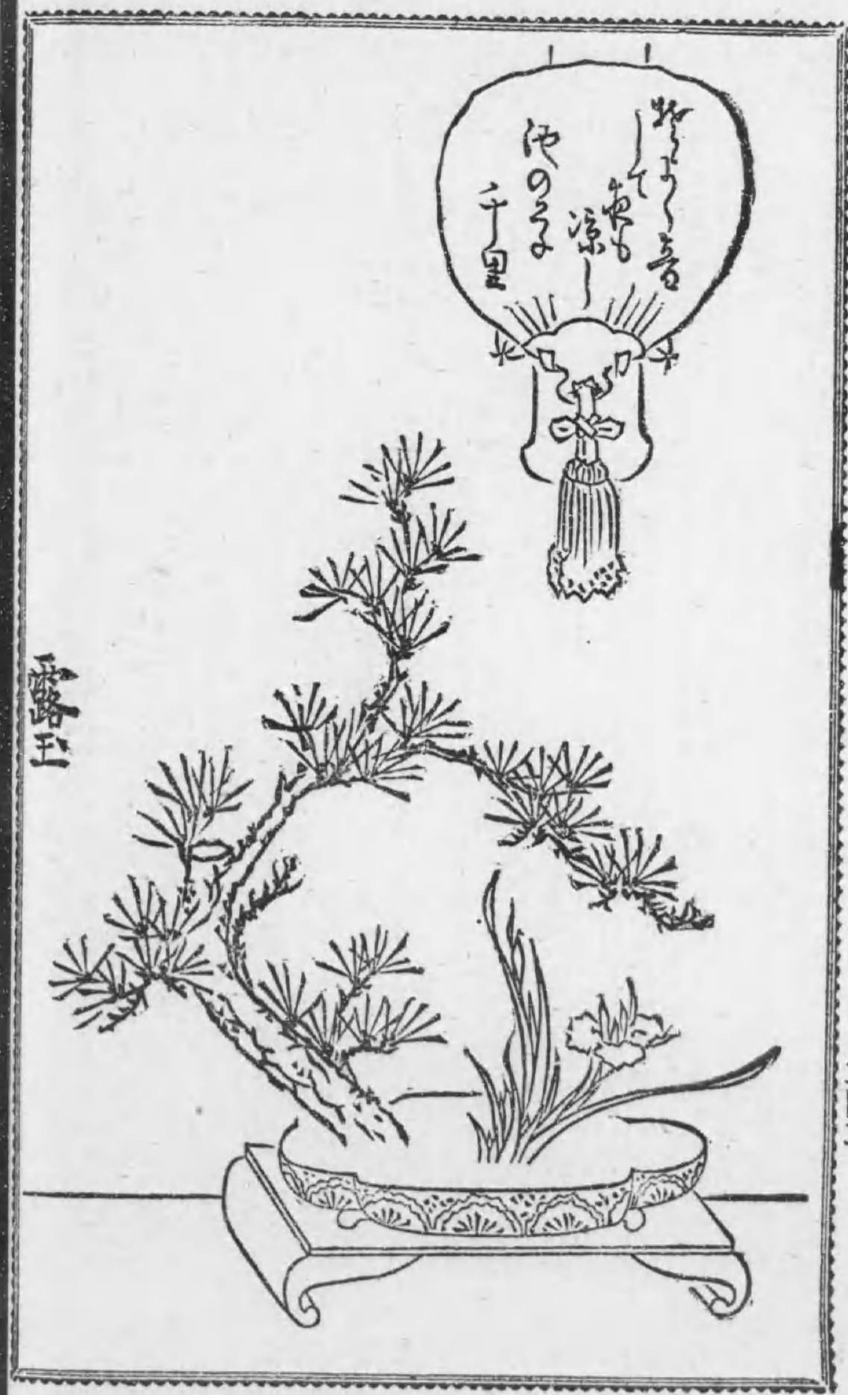
白柵



一霍

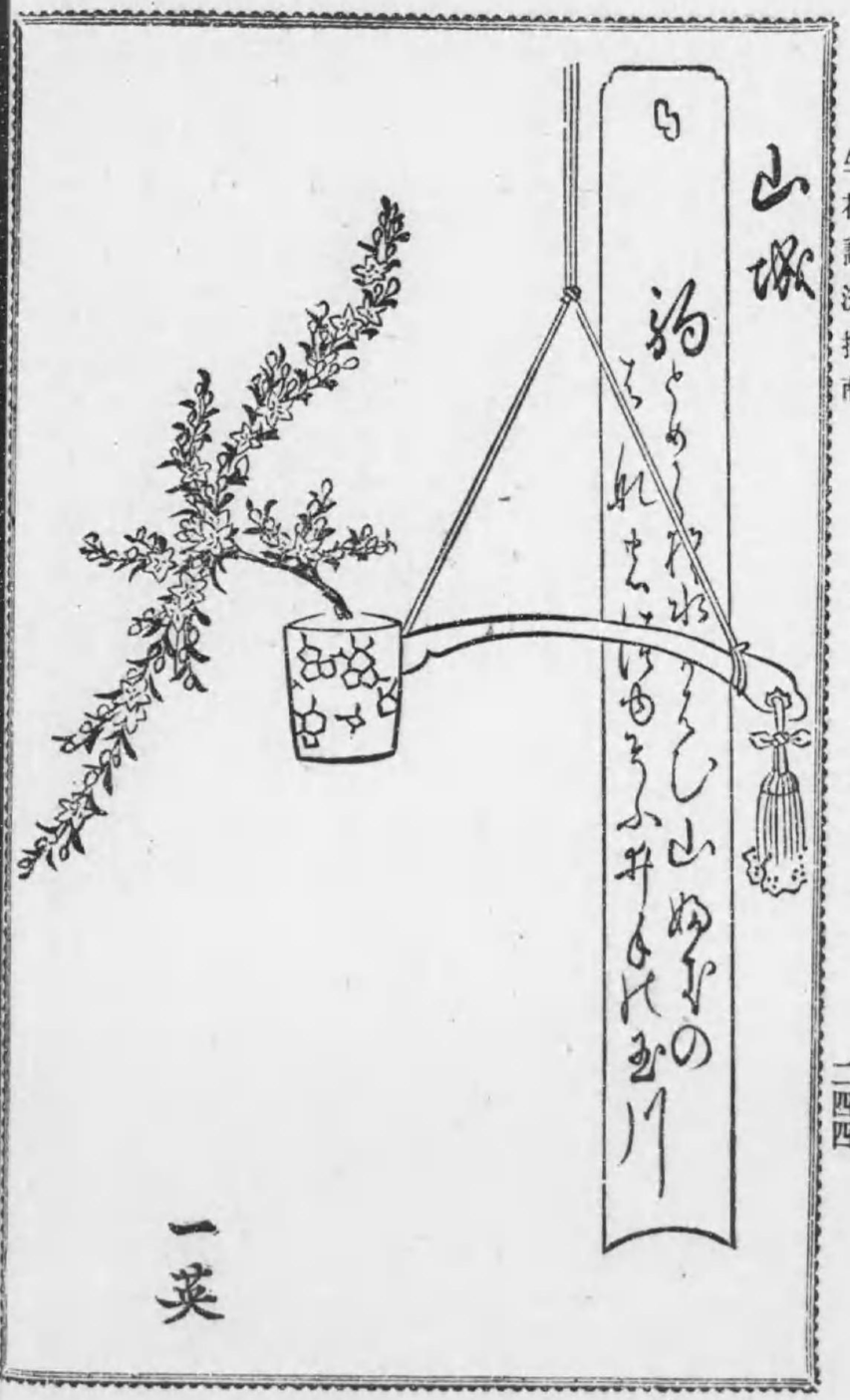
木柳

一閑


露玉

松竹梅

山吹



一英

松風

一池

武蔵

長

近江

一窓

陸奥

○池之坊流生花の體

○池之坊流は、原は供華として佛に花を供する爲の立華生け方に始まり、生花生け方は、それより出でたり。其立華には九ッ道具と云ふことあり。道具とは枝の名稱を謂ふなり。其九ッの名稱は、中枝の頂上を眞、其下を正眞、其下を胴、最も下を前置とし、見て左へ出でたる上の枝を副、其下を控とし、見て右へ出でたる枝の上を見越、其下を受、其下を流とす。即ち左の位置取の如し。

見越　受　流

●眞　正眞　●胴　前置

●副　控

上の位置取の圖は原とする立華の圖形にて、其枝の眞と、副と、胴とに●を附けたるは、立華體より抜きたる生花三枝の體なり。

これは次の頁に掲ぐる生花の體の圖と見合せて知るべし。

而して、立華にては胴と稱ふを、生花にては體と稱ふ。此三枝を三體和合とも稱ひて、又此眞副、體を天、地、人の三才に比す。即ち眞を人とし、副を天とし、體を地とす。されば、天と人との位置は他流と異なることを心得べし。これを生け形體にすれば左の如し。

一　體。　二　起。　三　抱。　四　心。　五　添。

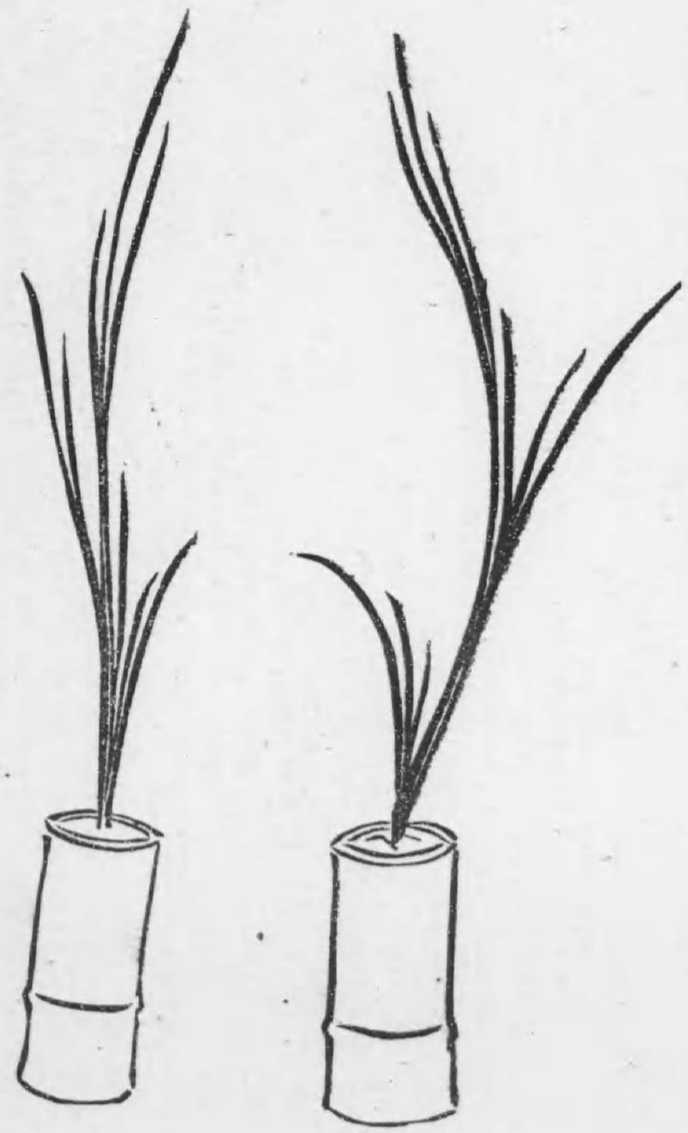
●印は陰、　○印は陽　●○印は陰陽和合　即ち中心なり。

一 體。　二 打込。　三 起。
四 起の會釋。　五 抱。
六 心。　七 打添。　八 向抱。
九 添の會釋。　十 添。
十一 體向。

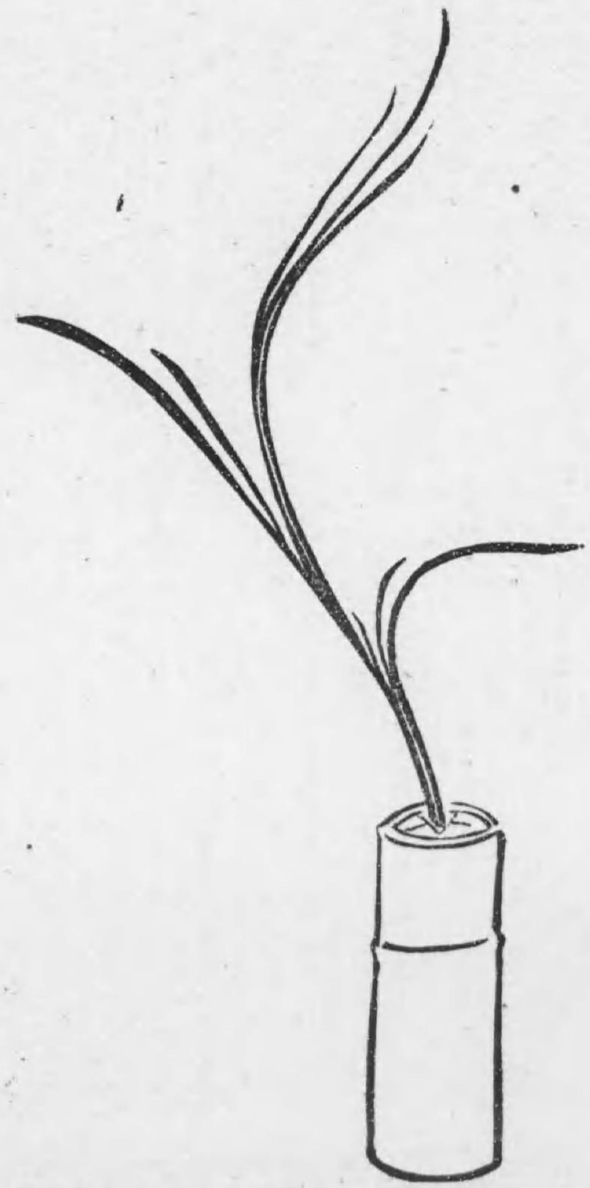
天地人の圖

○池之坊流生花の花形

○他流とは少しく異なる所あらん。即ち下の圖の如し。眞、副、體の三枝の他にある枝は、三枝同樣の枝を餘計に挿すにあらず。何れも皆、前後の會釋なり。但し、副の枝は下體の下へ出るを嫌ふ。



花形の本勝手、逆勝手は、前に記せし他流と同じ。



○池之坊流生花挿方の主旨

○此流儀は他流と異なりて、挿るには草木の天然のまゝにして、直なる物は直に挿け、曲れる物は曲りたるまゝに挿け、少しも手を以て人爲を加へざるを主旨とす。されども、已むを得ざるものは、人爲を用ゐざるを得ず。

○池之坊流にて他流に異なる件々

○梅の枝を撓むるには、沸湯に翳して後に撓む。若し又、天然の枝ぶりあらば、それを其まゝにて用ゆ。

○花配木は他流と同じものを用ゐることもあれども、挿る木と共木にて半月形に支ふことあり。これは挿したる花枝の外へ倒らぬ爲に支ふなり。尤も生けあげて後に支ひ留むるなり若し他の木を用ゐるならは、槿か又は柳を用ゐるべし。

尙又、大丈夫を期すれば、組井筒を用ゐる

べし。何れも下の圖の如し。當流にては股木といふ。

○注ぎ水の程度は、花を挿る前に水を花器へ八分目注ぎ、それより花を挿るべし。尤も後に增水するなり。

○花の根本に剪刀を入るゝには、花器の內側へ切口の密着するやうに、斜に入れて切るなり。

○生花の長は花器の高さの一長半か、或は花器の口の徑しの一長半かにして挿るなり。これを定法とす。若し又花器を花臺に載するならば、花臺と花器との高さを合せたる高さの一長半にすべし。これを外れて縱し二長になるとも、二長より高く挿るは見苦しゝとす。

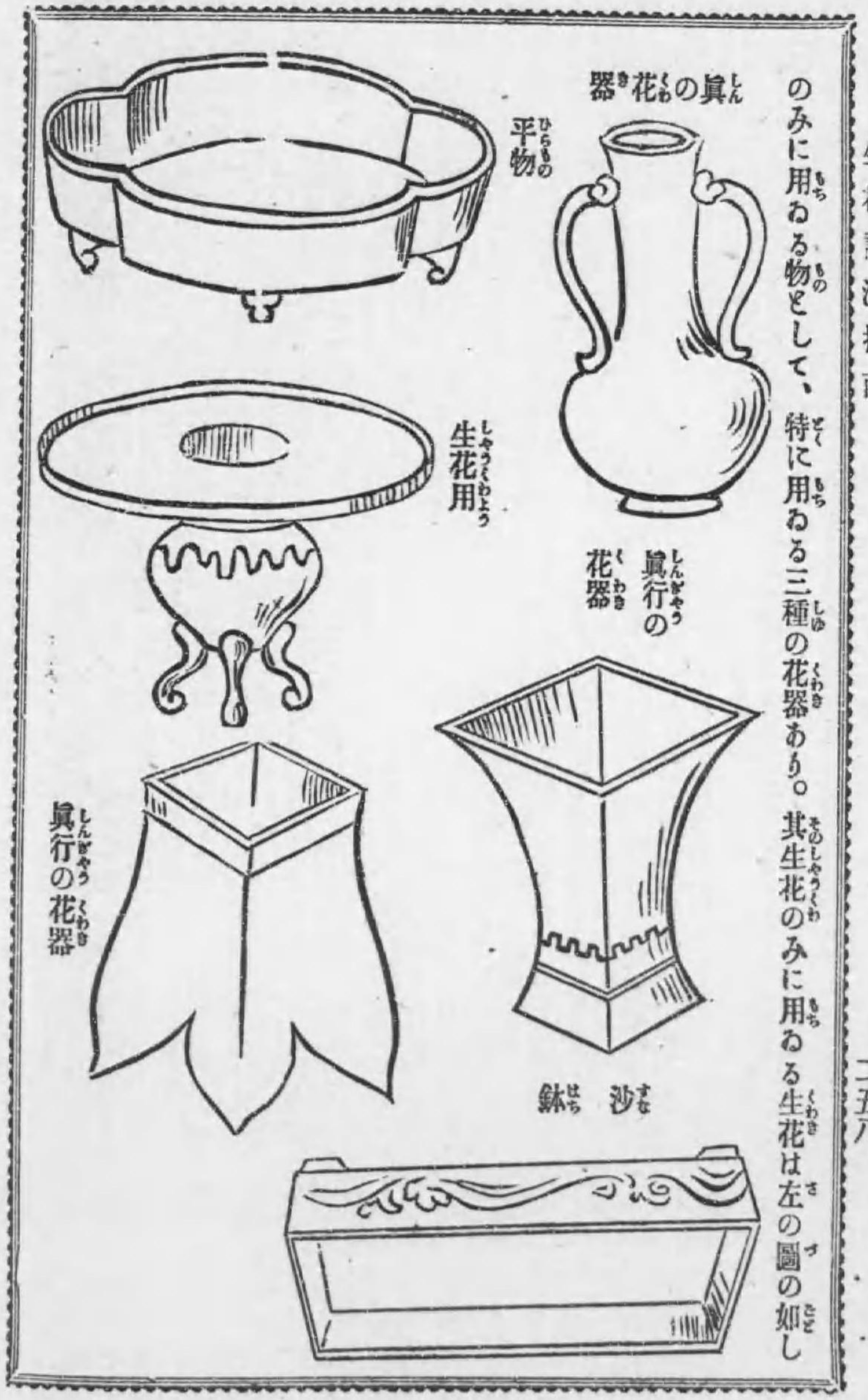
○花枝を挿る順序は、先づ一に體枝を挿れ、次に眞枝を挿れ、終りに副を挿れ、生け上げて後に配木の際まで增水を注し置くなり。

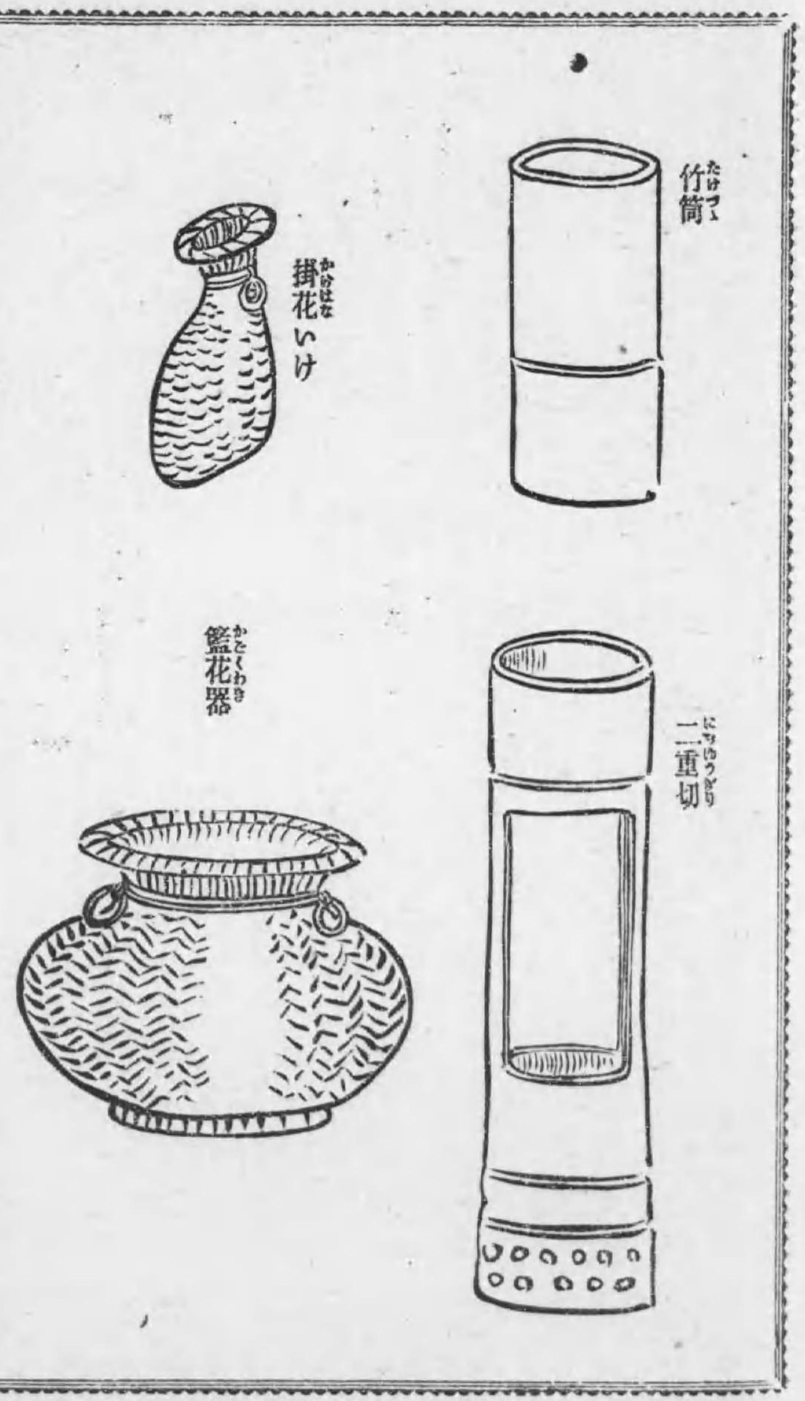
○花枝の生け方は、花器を手放して挿けず。左の手にて挿枝を持ちながら、手を花器の緣にかけ拇指と食指と中指とにて地枝を持ちながら留め、右の手の拇指と食指と中指とにて次の挿枝を撓めながら挿れ、又、右の手にて次の枝を挿れ、左の手は始終花器より放たず、生け終りて後に放つなり。

○池之坊流に用ゐる花器

○當流にても他流同一の花器を用ゐることもあれど、立華專用の物、立華生花兩用の物、生花

のみに用ゐる物として、特に用ゐる三種の花器あり。其生花のみに用ゐる生花は左の圖の如し





○池之坊流生花の傳花

○傳花とて皆傳の生花あり。これに、五ケ條の傳花と七種傳の傳花とあり。

五ケ條の傳花は、實物、葉物、蔓物、松竹梅、櫻、楓、出船、入船、泊船にて、七種傳の傳花は、芭蕉、蓮、水仙、萬年青、椿、牡丹、朝顔なり。

○五ケ條傳花の挿方

○實物は客花として床に生くべからず。されど、花數瓶あらば、其内の一種として列ぶるは苦しからず。此實物生の根〆には必ず陸草を用ゐること定法なり。他のものは決して用ゐず。さて斯く客花として床に生くべからずと言へど、千兩の實のみは花として床に生るを許す。此ことは心得おくべし。元來當流にては、實物は會の花に挿るを相當とするなり。

○葉物は置花に限りて生るものにて、掛花には生けず。而して此根〆には花物を用ゐてよし。是亦會の花にて、式立ちたる席には生くべからず。

○蔓物は總て草の花形に生るべし。されば、掛花に生るか、又は籠入の土器に生るを最もよしとす。置花ならば二重切の上に生くべし。手ある花器には生くべからず。

○松竹梅は共に一瓶に生るに眞、行、草三樣の挿方あり。草の挿方ならば、松は眞、副何れにても枝ぶりに應じて用ゐ、根〆には熊笹を用ゐるべし。而してこれを挿るには、組井筒の花配を用ゐ、井形の右向ふに松を挿れ、左向ふに梅を挿れ、前の中程に竹を挿れるなり。さて當流にては、松竹梅を置きたる同じ床には、他の生花を置かざるものとす。

○櫻は大輪と小輪とを一瓶に挿け雜へるには、眞に苔を用ゐ、中段下段に開きを取合せて挿る。此眞は糸櫻を用ゐるをよしとす。又、苔付を一本挿け雜ふるも可し。而して櫻は、同じ櫻の種類のみ挿け雜ふるものにて、他の花は挿け雜へず。但し松のみは下段に一本挿け雜ふることあり。さて又櫻も床に置けば他の花瓶は置かざるものとす。

○楓は根〆より陰の方へ綠葉を使ひ、副と根〆との間へ木を露はす。尙又、風枝とて葉を去りたる枝を使ふことあり。

○出船生の他流に異なる所は、遠き渡海と近き渡海とに挿け分くることあり。遠きは花を幽かに生けて高く釣り、近きは花やかに生け、船を低く釣るなり。

○入船生は、遠近は前に同じ。其他は他流と異なること無し。

○泊り船生は、夜の體に物靜なる趣を生るを定法とす。

○七種傳傳花の挿方

○芭蕉は花を雜へず、葉數を三枚、或は五枚、或は七枚、或は九枚まで挿る。但し、風吹葉と折葉とは必ず雜せて生るを定法とす。

○蓮は苔を上段中段に用ゐ、開きは下段に用ゐ、葉は開けるを眞に用ゐ、中段にも同じ葉を用ゐ、下の水際に撞木葉を卷葉にして使ひ、朽葉は水際の前に置き、小さき浮葉を一枚水に浮かし、蓮肉は自然に横へ出す。此花は當流にては祝儀の席に用ゐず。

○水仙は、當流にては二株か三株かを挿く。他の花は二株挿るを嫌へども、此花に限りては苦しからず。四株以上多數挿れば、花の莖短くして醜き故なり。又、此花は横に出すを嫌ふ。水仙は冬の珍花として尚ぶものなり。故に冬季は他の花の根〆にせず。春に至れば根〆に挿ることあり。又、水仙は苔を低く挿れ、開きを高く挿れ、葉數を偶數に生る。而してこれは、置花が向ふ掛ならでは生けず。横掛などに生るを許さず。他流にては陰花として祝儀の席に用ゐざれども、當流には用ゆ。

○萬年青は、流し葉、立て葉、前葉を主とし、他の葉はたゞ會釋葉とす。挿方は立て葉の表を裏に見て、實を添へて客位の方へ赴かすなり。而して實は一本に限る。二本以上は挿けず。又、葉數は六枚、或は八枚、或は十枚、或は十二枚まで挿る。當流にては此花を掛花、一二重物などに生けず。

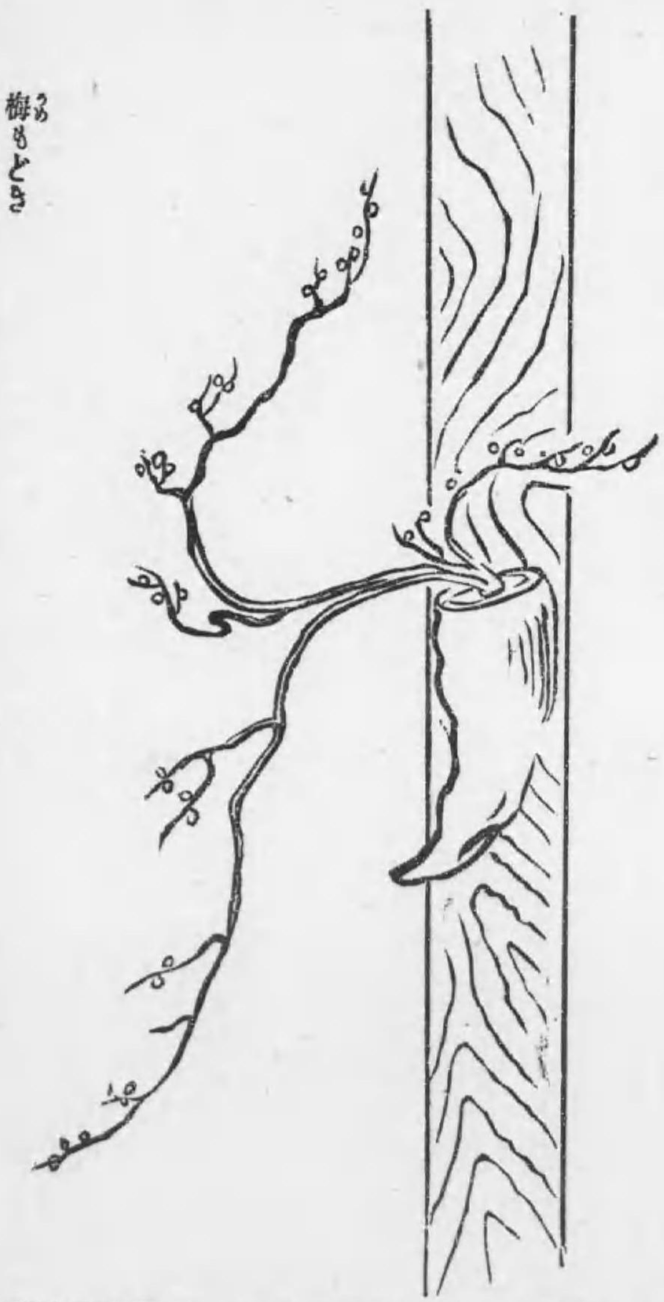
○椿は、阜下などの一輪生を傳花七種の一とす。此一輪生は、花一輪に葉三枚半にて、共に數を五つとす。又、二輪生にても、葉數は三枚半に限るなり。而して花器は土器か金屬製を用ゐるなり。横掛には生くべからず。葉は表面を此方に見せるやうに生るべし。

○牡丹は、當流にては一種挿にす。他の花とは挿れ雜へず。又、決して掛花には挿れず。茶席には生けず。他の花と共に床に列べるときは、此花を上坐に置くなり。花器は土器か、金屬器かを可しとす。挿方は苔一輪と開き一輪とを生るなり。葉は五枚か七枚かの奇數を用ゐ、苔は高く、開きは低く挿るべし。又、花の色は同色を可しとすれども、若し同色ならざるときは色雜りても苦しからず。

○朝顔は、當流にては水上法他流と異なり。其法は蔓の切口へ煙草の脂を着け、其上を紙片にて包み、糸にて括りて水中へ吊し置くなり。此花は掛花か釣舟かに生るを可しとす。花は苔一輪開き一輪を生け、生けるには竹の穗先か、萩の枯枝かを添へて生け、生け上げて露を打つなり

○池之坊流挿方圖式

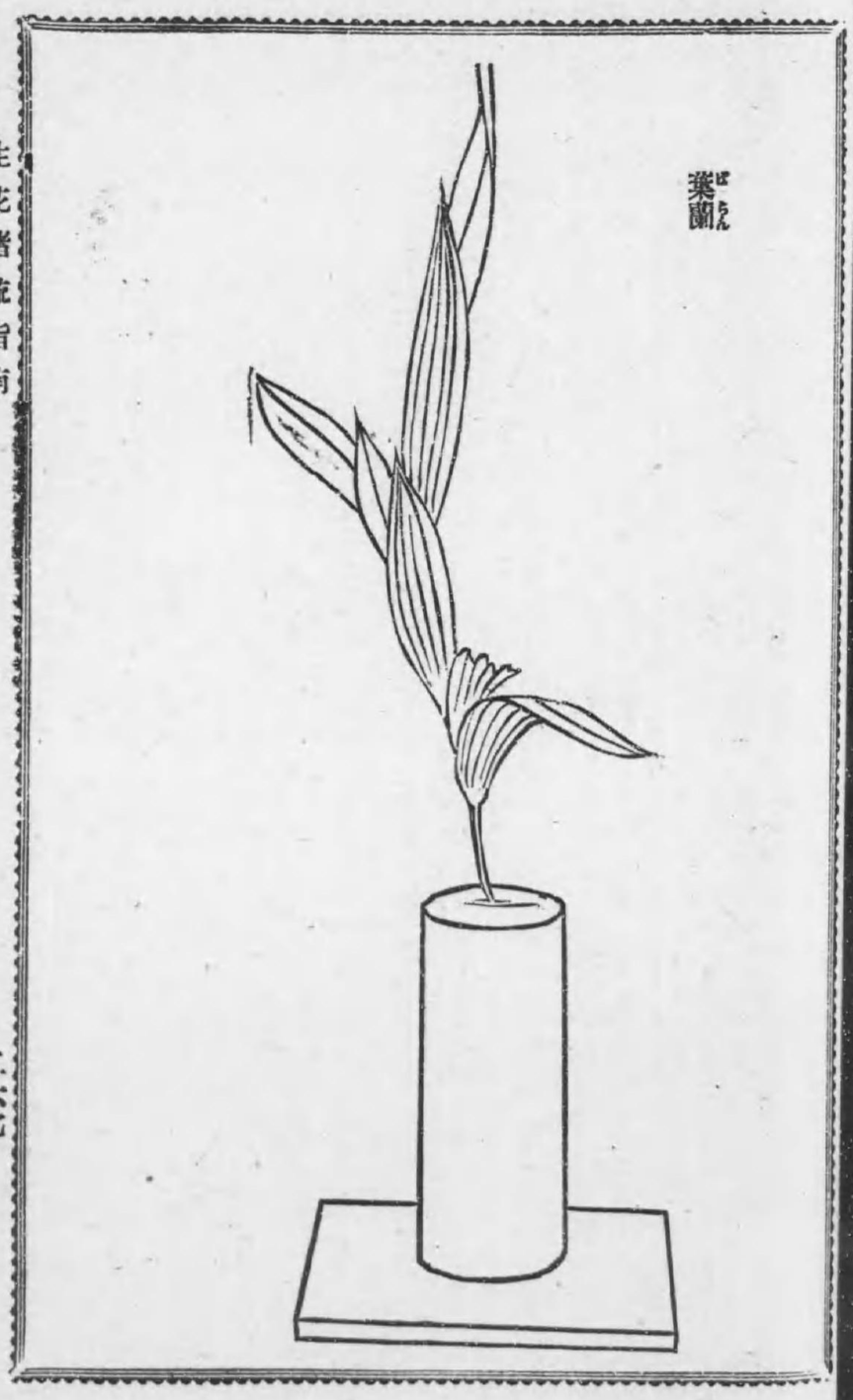
梅もどき



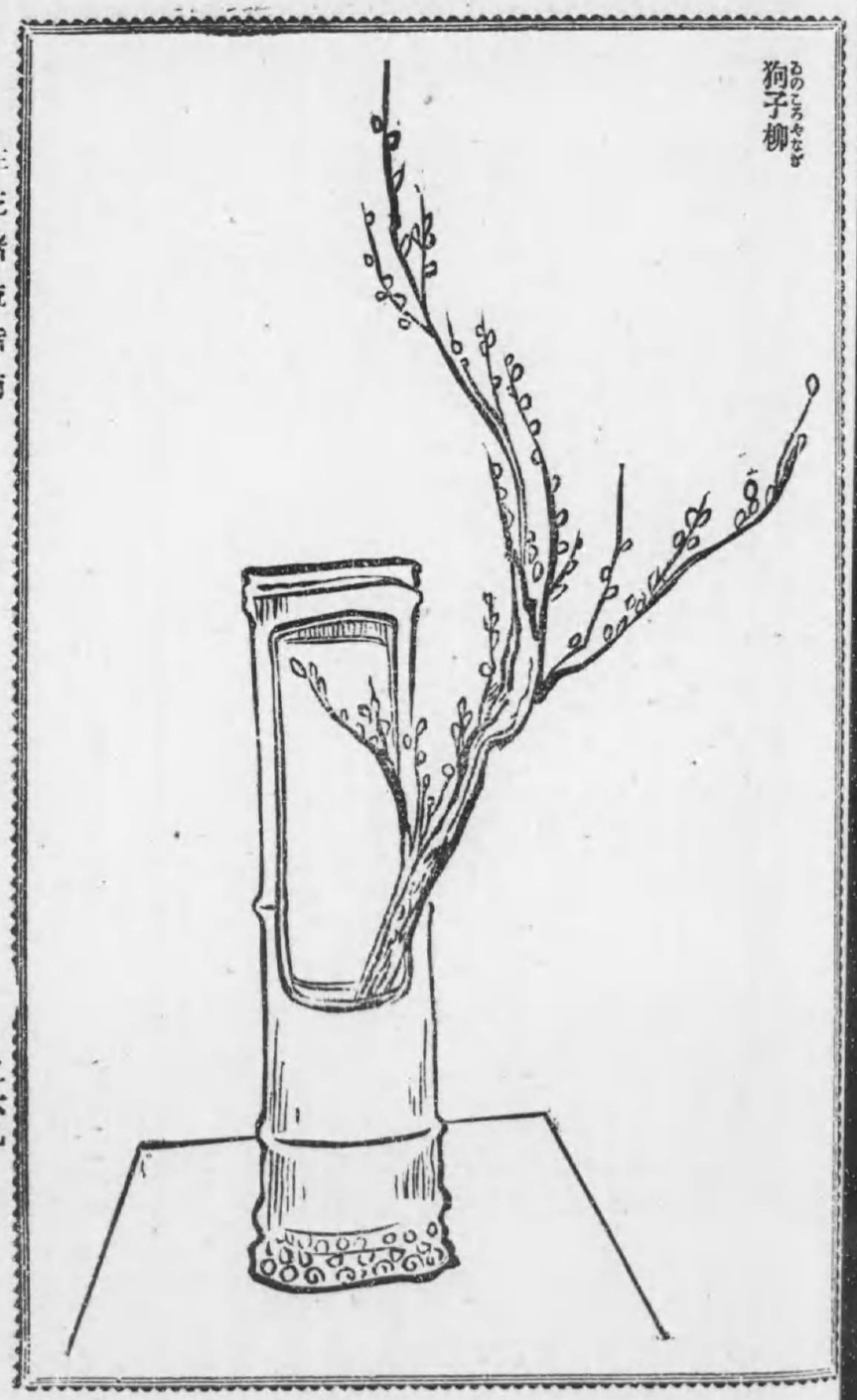
牡丹

梅に金錢花

葉蘭

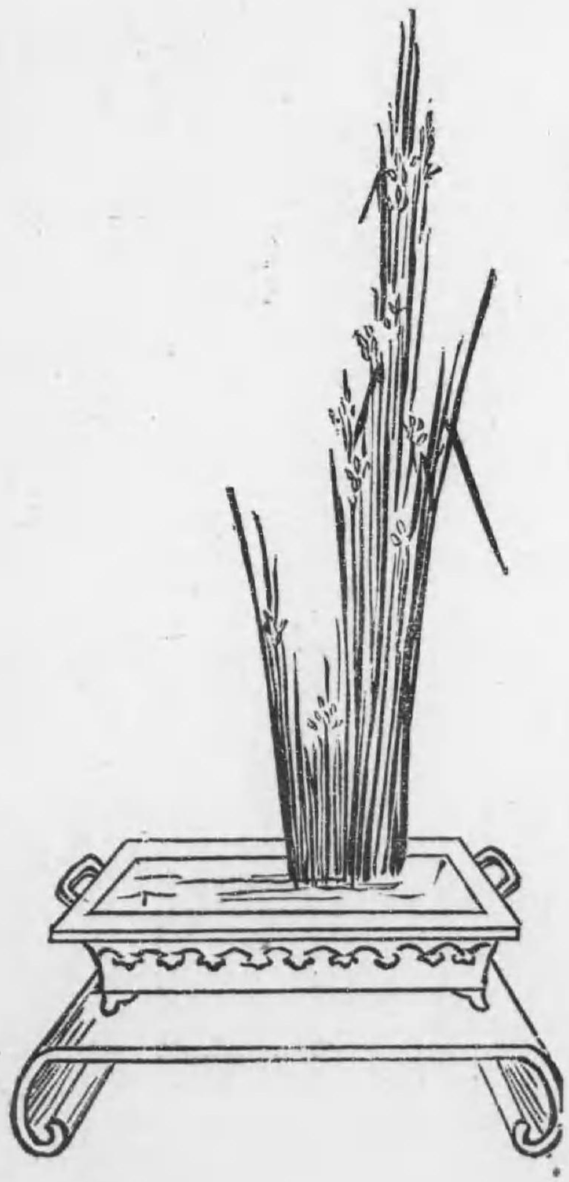


金雀


狗子柳

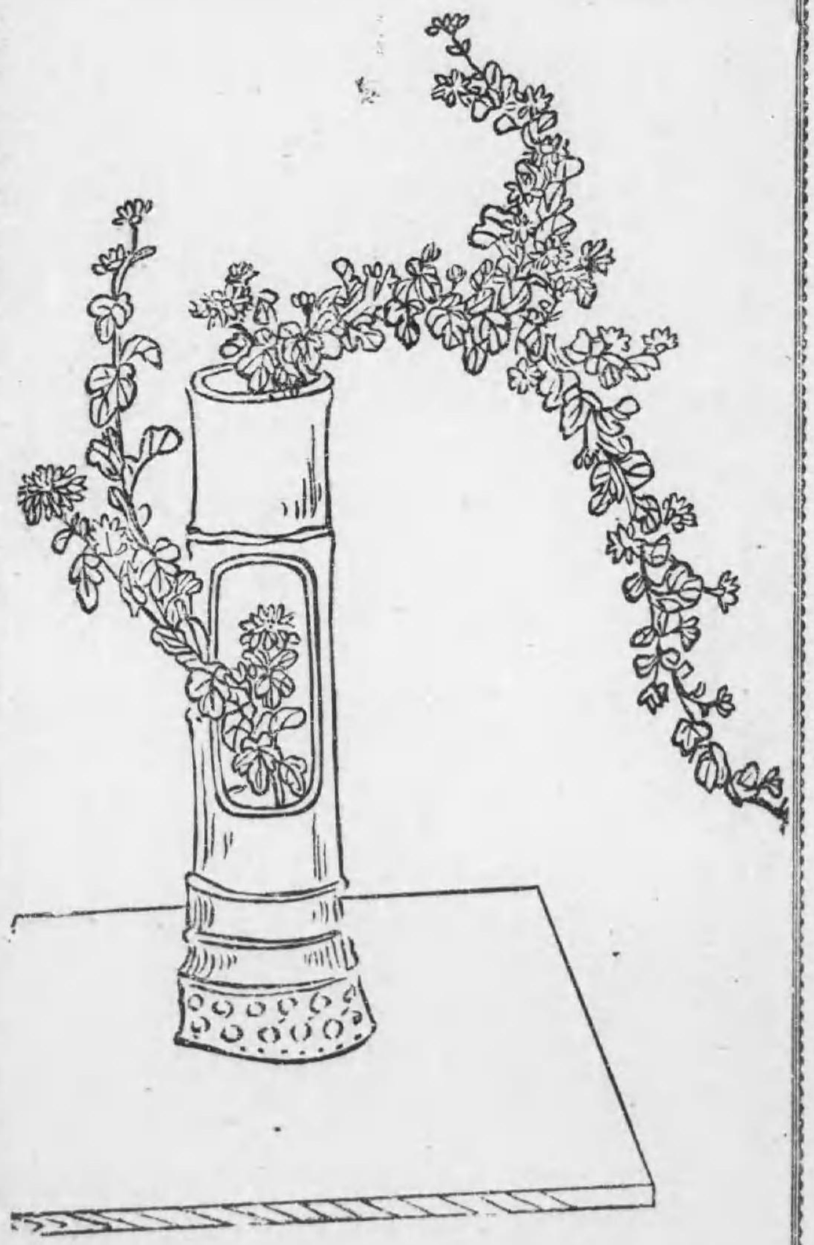
河骨（かうほね）

女郎花（をみなへし）



太蘭

菊



以上掲げしごとく、挿方の形容こそ異なれ、そもやしないかた水揚のはじめより、通じての心得には、あまり異なりたること無し。されば、流儀によりての異同は、全部を通覽されたれば自から知らるゝを得べし。

生花諸流指南 終

275
207

大正三年十月廿一日印刷
大正三年十月廿五日發行

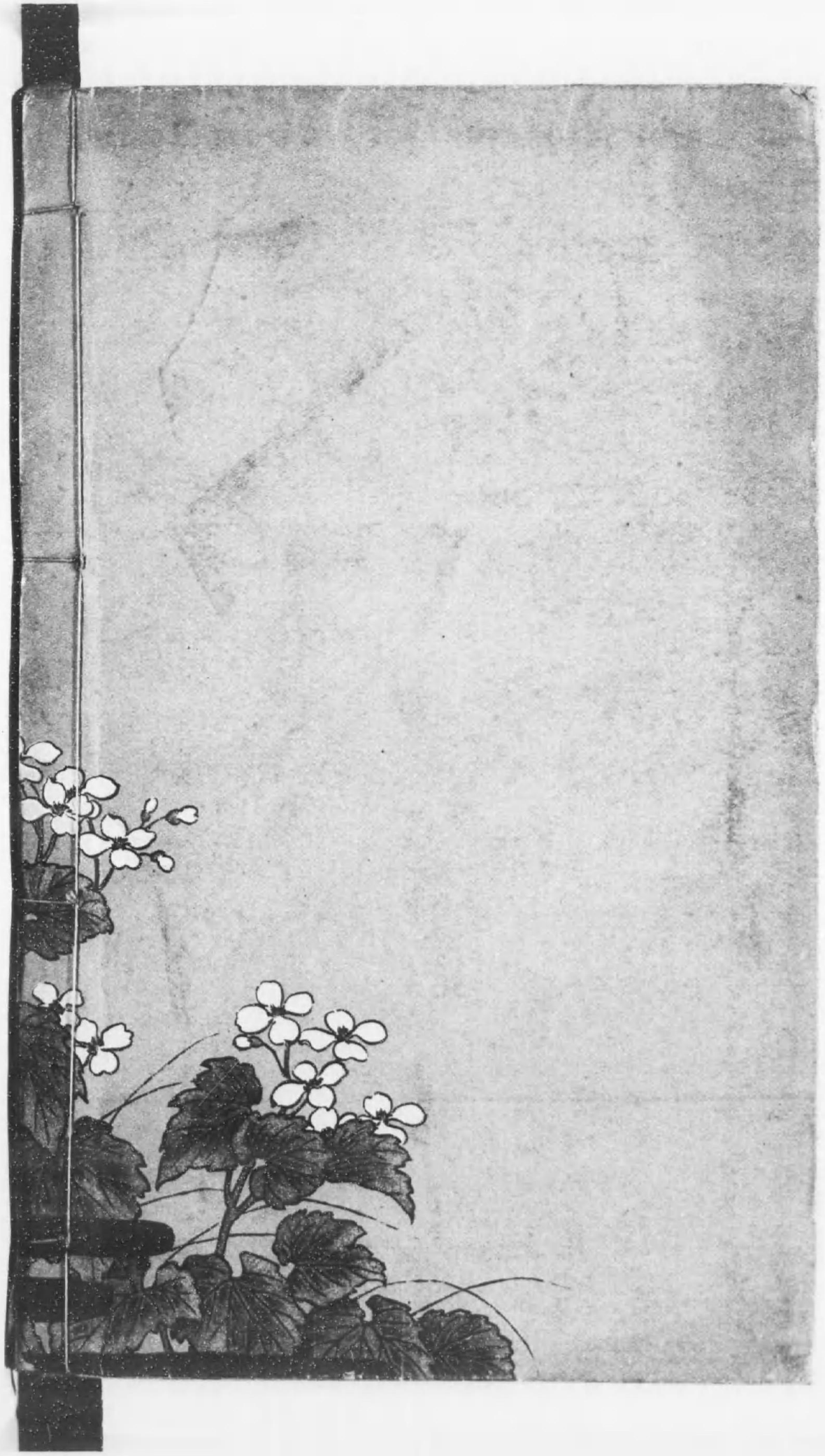
不許複製

編著者　所緣齋一嘯編

發行者　大阪市南區安堂寺橋通四丁目百九番邸　井上尙一

發行者　東京市日本橋區小傳馬町一丁目一番地　井上鐵次郎

印刷者　大阪市西區阿波座中通二丁目四番地　荒木佐兵衛

發賣所
大阪市南區安堂寺橋通四丁目百九番邸　一書堂書店（振替口座大阪三四九四）
東京市日本橋區小傳馬町一丁目一番地　國文館書店（振替口座東京一五八三〇）

終